

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 福島大学大学院教職実践研究科 (教職大学院)
	事業名：福島の未来を拓く「新・理科セミナー2023」
	研修等名：【NITS・福島大学コラボ研修】 主タイトル：福島の未来を拓く「新・理科セミナー2023」 副タイトル：～全国からの理科教育の風を感じる～
	開催日時：令和5年12月23日(土) 13時～16時30分 開催場所：福島大学 (福島県福島市金谷川1番地) 参加人数(総数)と参加者の属性：総数：193名 小学校教員125名、中学校教員8名、高校教員1名、大学生7名、大学院生7名、教育行政28名、大学教員7名、企業7名、その他3名

内容：※全体発表の内容をテブ起こしするなど、具体的に記載してください。研修等の様子は、写真を右に貼り付けてください。

【パネルディスカッション】13：10～15：30

パネルディスカッションのパネリストは、吉村真司先生(福岡県教育センター指導主事)、下吉美香先生(神戸市立雲中小学校主幹教諭)、北村聖子先生(香川県丸亀市立城西小学校教諭)、境孝先生(横浜市立立野小学校教諭)の4名である。上記のパネリストは、令和2年度から令和5年度の全国小学校理科研究協議会の全国大会を開催した会場校において、研究の推進役の先生方である。

コーディネーターは、福島県小学校教育研究会理科部会事務局の鳴原卓先生(福島県郡山市立明健小学校教諭)が行った。

吉村先生からは、「真の問題解決の力を身に付けた子供の育成」というテーマでの主張がなされた。下吉先生からは、「科学の有用性から未来を拓く子供の育成ー共有、共感、共創の学びを通してー」というテーマでの主張がなされた。北村先生からは、「納得するまで追究し、みんなで考え、解決しようとする子の育成～『あれ?』『きっと...』『...』ということは...』『それなら...』が続く理科学習～」というテーマでの主張がなされた。境先生からは、「自然をじっくり観察し、浸る子どもを育成する生活科・理科」というテーマでの主張がなされた。

それぞれの発表の後には、フロアーからいくつも質問があり、発表内容についての理解が深められた。さらに、指定質問者として、本学教職大学院で理科の研究を進めている2名から、理科の授業において楽しいと感じる瞬間や、それぞれの実践の背景になる教育観についての質問があった。

また、コーディネーターからは、今の理科教育の課題や今後の理科教育がどのような方向に向かっていくべきなのかについての話題提供があり、「本当の意味での子供主体の問題解決にしていかなければならない」「教師の意識を高めていく必要がある」など、パネリストとコーディネーターの間で熱い議論が交わされた。

【対談】15：40～16：30

対談は、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の有本淳氏と、本セミナーの企画者である福島大学の鳴川哲也(前文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)で行った。

まずは、パネルディスカッションでの話題を基に、子供の姿を基に、理科教育について語り合うことの重要性について話し合われた。有本氏からは、指導と評価の一体化の重要性に関して、子供一人一人の状況を見取り、資質・能力を育成していくことが大切であるという話があった。

また、有本氏からは、理科の学び方について、従来小学校理科は「問題解決の活動」を重視してきたわけだが、この活動が形骸化しているのではないかという問題提起があった。それについて、今回の学習指導要領の改訂に直接携わった鳴川は、その活動において育成を目指している「問題解決の力」を明確にしたのであるから、子供にその力が育成されるよう授業を展開されていけば、形骸化は生じないのではないかという反論があった。有本氏は、問題解決の活動が子供の発想によって、柔軟に展開されることが必要であり、もし、硬直した問題解決になっているのであれば、改善していく必要があるとの発言があった。この点は「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が求められている今日において、重要な示唆であった。

さらに、有本氏からは、理科の学びが日常生活にどのように関連しているかを考えることで、理科を学ぶ意義や有用性を感じるようになるとの話があった。今後の理科教育を考える上での重要な示唆であった。

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

- ◆ 参加人数は参集型とオンライン型を含め、193名となった。福島県内はもとより、県外（北海道、青森県、岩手県、宮城県、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、福井県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、島根県、広島県、徳島県、香川県、高知県、福岡県、長崎県、熊本県、大分県）からの参加者もあった。全国各地からの参加者があったことは大きな成果である。
- ◆ 実施後のアンケートには、「先生方の『理科が好き！』という思いがひしひしと伝わる発表でした。今まで参加した他のセミナーや研修会とは違う熱いパワーを感じました」「様々なところで活躍している実践家の先生方と教科調査官の有本先生と鳴川先生の話の首がもげるほど頷きながら聞かせていただきました。先生方の情熱が伝わると同時に郷土を思う心や子どもの未来を思う丁寧な見取りなどにふれることで、私自身の心が感化されました」「全国の理科の先進校のお話をうかがうことができ、とても勉強になりました。学校で、大型モニターに映して複数にて参加させていただきました」「企画が素晴らしいです。過去4年間の全小理発表校の先生方によるリレー発表、福島の先生がファシリテートするパネルディスカッション、学生による指定討論、新旧教科調査官のクロストークとどれをとっても魅力的な発信でした。この企画により、全国でつながった理科教育の風が巻き起こると感じました。各県の発表と主張、福島の先生方や学生からの熱心な質疑も大変良かったです。教員研修や教員養成としても価値あるものだと思います」などといった感想が寄せられた。これらの事から、本セミナーには一定の成果があったと考える。

アイデアや工夫したこと： ※3～5つ程度の箇条書きしてください。

- ◆ 過去4年間の全国小学校理科研究協議会の全国大会を開催した会場校の研究推進役の先生方に参集いただいたことによって、直近の全国の研究内容を知るよい機会になった。
- ◆ 参集型とオンライン型の参加形態にしたことで、県内はもとより、県外からも多くの参加者を得て開催することができた。
- ◆ 小学校理科の教科調査官の7代目と8代目の対談は、昨年度実施した「新・理科セミナー」に引き続き、今回も実施した。今後も定例化していきたい。
- ◆ セミナー終了後も、YouTube 限定公開でセミナーの様子を公開し、振り返りができるようにした。

<写真・図など> ※会場の熱気や規模がわかる写真、参加者の表情がわかる写真（寄って撮影またはトリミング）を撮影してください。

【パネルディスカッションの様子】



【対談の様子】

